

数理科学科だより

玄奘三蔵の苦難

煩惱の数は 108 あり、それが除夜の鐘の回数になっていると言われる。この話をインドの知人にしたら、その人は驚きながらヒンドゥー教の儀式では 108 の蓮の花を飾ることがあると教えてくれた。

矢野道雄著「インド数学の発想」(NHK 出版新書, 2011) に面白い指摘がある。古代インドの叙事詩「マハーバーラタ」は 18 巻、その中にあるかの有名な「バガヴァット・ギーター」は 18 章から成る。この親戚同士の戦争に集まった軍団の数が 18, 一つの軍団の象の数は 21870, 馬の数は 65610 である。これらの数は全て 9 の倍数である。九去法を用いれば直ちにわかる($10-1=9$ ということに基づく合同式の性質)。これらの数の各桁の数字を足し合わせると、 $1+0+8=9$, $1+8=9$, $2+1+8+7+0=18$, $6+5+6+1+0=18$ となるのでそれらの数は 9 の倍数であることがわかる。

このような 9 の倍数に対するこだわりは中国の「西遊記」にも見られる。中野美代子著「西遊記の秘密」(岩波現代文庫, 2003) には、孫悟空が学んだ術の数 72, そのうちの雲に乗る筋斗雲の術で、108000 里ひとつ跳び、竜王から奪い取った如意棒の重さが 13500 斤などなど、9 の倍数になる整数ばかり列挙され、説明されている。西遊記は唐の僧・玄奘が西天にお経を頂きに行く物語であるから、インドの影響があるのだろう。本紙第 9 号に取り上げられた南方熊楠の「十二支考」に孫悟空のモデルはインドの古代叙事詩「ラーマーヤナ」で大活躍するハヌマーン(猿の神)であろうと指摘がある。

さて、玄奘一行は苦難の末、5418 巻 (9 の倍数)のお経を頂き、雲に乗って帰国するところ西遊記の第 99 回目 (9 の倍数)、これまで彼らが遭遇した苦難の数が 80, これでは 9 の倍数にならぬと言うので、雲から突き落とされ 81 難 (しかも $9 \times 9 = 81!$) という試練が待っていた。まあ、お気の毒...まさに、西天への苦(9)学の旅であった。私も数学を苦学せねばと思う。(文責: 南出 真)

編集：山口大学理学部数理科学科

連絡先：083-933-5210(理学部学務係)

<http://www.sci.yamaguchi-u.ac.jp/dep/math/ex>